

本学が目指す教師像

本学の建学の精神は、創設者の八代斌助師が『聖書』の中から選んだ「神を畏れ、人を恐れず、人に仕えよ」(DEUM TIMETE, NORITE TIMERE POPULIM ET SERVITE EI.)という言葉です。

最初の「神を畏れ」とは、神を恐怖すべきものとしてではなく、畏れ尊ぶべきものであることを示しており、真理・真実に対する謙虚さをあらわしています。

次の「人を恐れず」とは、人間は神によって平等につくられた存在であるから、誰をも恐れることもなく誰にもへつらうことなく、対等に交際することが大切であるという意味です。いかなる権力者に対しても、また相手の数が多くても、恐れることなく立ち向かっていかなければ何事も成し得ることができないのです。平等を基盤とする国境をこえた同胞・兄弟意識をあらわしています。

最後の「人に仕えよ」とは、打算的利己主義からでなく、相手のためという“愛”を動機として行うものでなければならないという意味です。「ルカによる福音書」によると、主イエス・キリストは「あなたがたの間で一番偉い人は一番年の若い者のようにになりなさい。また、上に立つ人は、仕える者のようでありなさい」(『新約聖書』第22章26節)と言われ、隣人への愛に生きる人間となるよう求めたのです。

この建学の精神を基本理念として、本学では、国際性と良識を備え自ら主体的に行動する有為な人材を育成しています。

さて、21世紀に入り、世界は一段と激しく変容し始めています。国と国を隔てる「国境」というハードルはどんどん低くなり、経済では「連携」、政治では「統合」、暮らしや環境では「共生」という言葉に象徴されるように、言葉や文化の違いを乗り越えて共に手を携えて歩んでいく社会へと移行しつつあります。一方で、物質的豊かさの増大に反比例するかのようになり精神的貧しさが深刻化しています。このような状況の中で、建学の精神の持つ意味がますます重要になっています。

教職課程における教師の養成も、この建学の精神をベースにして実施されています。具体的に言えば、「自ら主体的に行動し、豊かな人間性を備え、人から信頼され尊敬される」教師を育成することです。以下の点を重視しながら、全学的な協力・指導体制をもってこの理念の実現に取り組み、「わが国の次世代を担う教育者」を養成しています。

①自ら資質を向上させ続ける自己教育力の獲得

今日のような変化の激しい時代にあって、特に教員には、教職についた後も、自己を教育者として、また人間として、生涯にわたって高めていくことが求められます。そのための不断の努力を可能にする自己教育力の獲得を目指します。

②教育者にふさわしい人間性の育成

豊かな教養や子どもに対する愛情と理解を持つとともに、人と深く関わることのできるコミュニケーション能力や協調性、教育者としての使命感を備えていることが必要です。このような能力に裏づけられた豊かな人間性を育むことを目指します。

③教員に求められる実践的指導力の養成

現実に教員としての職責を全うするには、様々な課題を持つ子どもたちと向き合い、具体的かつ効果的な指導や援助ができなければなりません。そのために必要な専門的知識および技能の修得と実践的指導力の養成を目指します。